

西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構： 大学博物館北側の元寇防塁

伊藤 慎 二

1. 西南学院の足もとの二つの遺跡：交流と対立

2016年に創立100周年を迎えた西南学院は、『西南学院創立百周年に当たっての平和宣言』を公表した。そのなかで、「国際社会の真の一員となり、〈平和を実現する人々〉の祝福の中に生きる者となる」（西南学院の戦争責任・戦後責任の告白（案）作業部会編 2016：7頁）ことが、西南学院の重要な基本理念であることを宣言した。その実現のためには、学院直下の大地に埋もれた国際関係の歴史に目を向けることも重要である。

本学院周辺には、国際関係に関連する対照的な性格の二つの重要遺跡が存在する。西新町遺跡^{にしじんまち}と元寇防塁遺跡である。本学南側の福岡県立修猷館高等学校敷地から明治通り（旧国道202号線）をはさんで中西・西新商店街周辺にかけての一带の地中には、弥生時代後期終末～古墳時代前期を中心とする西新町遺跡が広がる。西新町遺跡は、朝鮮半島起源のカマド炊飯技術を国内で最初に本格受容した代表的集落遺跡として著名である。「古墳時代の西新町遺跡は国際的な交易拠点として華やかな光を放ち、人や物が行き来する文化の集積地として隆盛した」（下原編 2009：134頁）と評されている。その後の国際貿易都市博多の発展につながる源流の一つともいえる。

そして、中央キャンパス1号館部分をはじめ本学院敷地南辺のほぼ東西方向延長線上には、鎌倉時代の「石築地」元寇防塁遺跡が存在する（大塚編 2002）。1274（文永11）年の元朝の軍勢による侵攻を受けて、元軍の上陸を阻止するた

めに鎌倉幕府の指揮下で1276（建治2）年頃に構築された一種の城郭遺跡である。この1274（文永11）年と1281（弘安4）年の二度にわたる「元寇・蒙古襲来」が、その後の日本文化・日本史の底流に明滅する「神風」・「神国」思想と日本人のアジア大陸観の形成に直接大きな影響を与えたことは良く知られる（片倉 1998）。戦前における元寇防塁の再発見と価値評価も、単なる歴史文化遺産ではなく、幕末・明治維新以後に再編強化された「神風」・「神国」思想と皇国史観の強い影響によって、排外的な国威宣揚や顕彰のための記念物に位置づけた部分が大きかったといえる。1918（大正7）年に、現在の東キャンパス部分に移転した西南学院と元寇防塁の「遭遇」も、このような時代背景のなかで起きた。

本稿では、西南学院大学東キャンパス内の大学博物館（ドージャー記念館）北側で戦前に良好な状態で発見されていたこれまでほとんど知られていない元寇防塁遺構の特徴と意義について、周辺の既知の元寇防塁遺構と比較検討する。

2. 西南学院周辺の元寇防塁遺跡

(1) 元寇防塁の概要

元寇防塁は、1274（文永11）年の最初の蒙古襲来である文永の役後に、鎌倉幕府の指揮により1276（建治2）年から築造が開始され、少なくともその66年後の室町時代の1342（康永元）年5月まで修築維持が継続していた史料が知られる（川添 1971）。西は福岡市西区今津から東は福岡市東区香椎までの博多湾沿岸約20kmにわたって、九州各国が約2～3kmずつ分担して築造したとされる（川添 1971・1977・2006, 柳田 1981・1984・1988, 柳田・西園 2001, 大塚 2013）。築造当初の鎌倉時代の記録には、「石築地」としてその名が記されているが、その特徴と性格を検討した中山平次郎が「元寇防塁」と名付け（中山 1913・1915：310-311頁）、現在では広く定着した呼称となっている。

元寇防塁の遺構は、近代にはほとんど地表から直接確認できないほど埋没や石材の持ち出しが進んでいた。しかし、1913（大正2）年7月に西区今津、



図1 今津（左）と生の松原（右）の元寇防塁

1920（大正9）年10月には早良区西新で遺跡としての認識に基づいて初めて遺構の掘り起こしが行われ、ようやく具体的な特徴が明らかになり、博多湾沿岸の各地で遺構所在地の把握が進んだ（竹田編 1915, 川上 1941）。アジア・太平洋戦争後には精密な考古学的発掘調査も開始された。現在までに行われた考古学的発掘調査の事例としては、西区今津（鏡山ほか 1969, 昭和地下工業株式会社編 1972）、西区生の松原（鏡山ほか 1968, 荒牧編 2001）、西区姪浜（柳田 1988, 柳田・西園 2001）、早良区西新（柳田ほか 1970, 松村・池田 1998, 大塚編 2002）、博多区博多（井沢編 1992, 佐藤編 2002）・東区地蔵松原（井澤・長家 1995, 榎本 2000, 九州大学埋蔵文化財調査室 2016）などがある。

これらの調査の結果、元寇防塁の形態は、地区により共通する特徴と異なる構築方法が存在することが明らかになった（柳田 1988, 柳田・西園 2001, 大塚 2013）。基底部分の標高は約3～4mで、断面形態がほぼ台形状（箱形）であることで共通する。しかし、海側（正面）・陸側（背面）とも壁面を石積みにする今津・西新・博多地区に対して、生の松原地区は海側壁面のみを幅狭の胸壁状の石積みとし、一段低い陸側は砂と粘土を版築状に互層に重ねた土塁状になっている（図1右）。また、今津地区の玄武岩主体区間と博多地区は土塁壁内部も含めてほぼすべて石積みであるのに対して（図1左）、西新地区は粘土の基礎地業上に砂と粘土を版築状に互層に重ね海・陸側両壁面のみが擁壁状

の石積みになっている（図4）。今津地区の花崗岩主体区間も墨壁内部を砂で満たすが、上部は再び石を充填することが西新地区と異なる。なお、西新地区西南学院大学1号館地点例のみ、石墨背後の陸側に独立した版築状の土塁が並走する（図5・6）。

各地区の防塁の基底幅は、生の松原例の陸側土塁状部分も含めて、ほぼ3～4mほどである。本来の高さは不明確な部分も多いが、もっとも保存状態の良い今津地区では約3mの残存例がある。

石材は、今津地区では周辺産出の玄武岩と花崗岩、生の松原地区では周辺産出の砂岩（姪浜石）と巨晶花崗岩（ペグマタイト）、西新地区では西区姪浜周辺に多い砂岩（姪浜石）と礫岩、博多地区では東区名島海岸産の礫岩と砂岩が主として用いられている。

なお、元寇防塁遺跡の国指定史跡地区は、西区今津（今津地区）、西区横浜2丁目38番付近、西区今宿駅前1丁目22番（長垂地区）、西区生の松原1丁目・小戸5丁目付近（生の松原地区）、西区小戸3丁目57番（向浜地区）、西区小戸1丁目34番（脇地区）、早良区百道1丁目10番付近（百道地区）、早良区西新7丁目（西新地区）、中央区地行2丁目12番19号（地行地区）、東区筥松4丁目1番・箱崎6丁目8番（地藏松原地区）などがある（福岡市教育委員会編 1978）。これらのうち、今津地区・生の松原地区・西新地区の各元寇防塁遺構が、代表的な保存整備例である⁹⁾。また、西新地区元寇防塁の遺構の一部が検出された西南学院大学1号館1階中庭では石墨と土塁の全体像が推定復元されており、博多区博多小学校では発掘調査で検出された防塁関連遺構の一部を校舎建物地下でそのまま露出展示している。

こうした元寇防塁の技術的系譜については、多くの未検討の課題が残る。たとえば、元寇防塁の本来の呼称である「石築地」を考慮すると、古代～中世の宮都・官衙・寺院で広く採用された築地塀の構築技術との比較も重要である。西新地区や生の松原地区でみられる版築状の工法は、実際に築地塀の数少ない考古学的調査例である京都府向日市の長岡宮の築地跡（山中編 1983）の構築方法や規模と一定の類似性もみとめられる。また、長距離におよぶ遮断型の城

郭技術の国内での先行的採用例は、大宰府の水城のほかに、鎌倉幕府成立期に奥州藤原氏が対鎌倉方防衛対策で福島県国見町に構築した総延長約3kmにおよぶ阿津賀志山防塁の二重空堀を挟む三重土塁例（木本編 1994）があり、元寇防塁構築構想時の鎌倉幕府内で念頭にあった可能性がある。さらに、生の松原元寇防塁の海側だけに一段高く構築された胸壁状の石積みは、同時代の中国・朝鮮半島の城郭で一般的な堞・女牆（ひめがき・여장）（愛宕 1991, 孫 2011）と外見的形態やおそらく機能に類似性があり、同時代の大陸側の城郭技術との関連性についても検討の余地があるといえる。

(2) 各地点の概要

貝原益軒の『筑前国続風土記』巻二十早良郡上の紅葉松原の条では、本学院周辺の江戸時代当時の状況が以下のように記されている。「此松原の北の海辺に、小高さ土堤あり。いにしへ異賊襲来のふせぎのため築し所也。今は石垣は見え、地の下には、猶所々残れりと云。近き比も、此辺の地をほりて、石垣

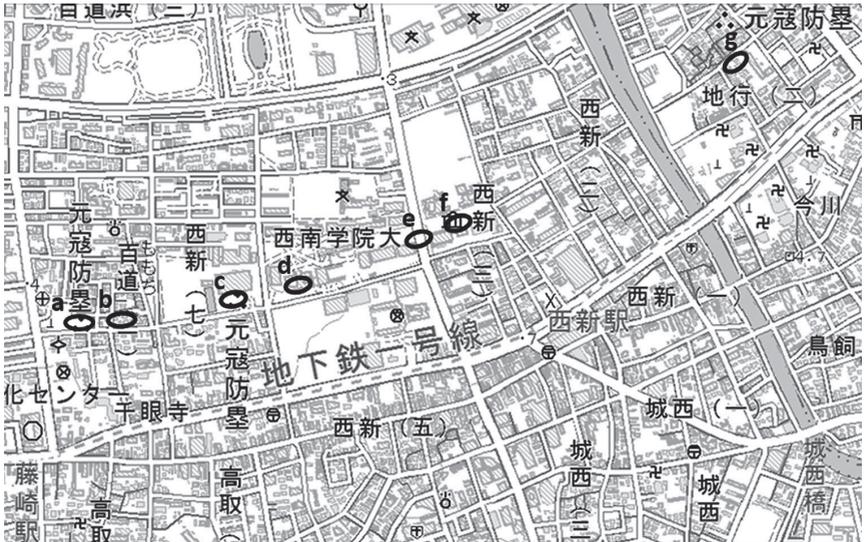


図2 西南学院周辺の元寇防塁指定地・遺構確認地点 (a~g)

の石を取し者多し。其石に筑前、筑後、豊前、豊後、日向などと国の名をきざみ付たり。是はいにしへ此土堤をいとなみし時、公家武家の命にしたがひて、九州の人々あつまり築し故に其国の名をしるせしならん」(川添 1971: 98-99頁)。まるで天下普請の近世城郭を連想させるような国名の刻字の真偽は別として、近世にはすでに元寇防塁遺構は地表から直接確認できず、石塁とも土塁とも区別がつかない状況であったことがわかる。

かつての筑前国早良郡百道原(ももち)原(百道松原・紅葉松原)にあたる福岡市早良区西新の西南学院大学周辺には、今回新たに報告する東キャンパス内の大学博物館北側地点(f)を含めて、これまでの調査研究で合計7箇所の指定地や遺構確認地点がある(図2)。以下に各地点の概要を述べる。

a. 早良区百道1丁目10番付近(百道地区): 図3

墓地を含む一帯が元寇防塁百道地区または藤崎地区の指定地として保存区域になっており、保護柵内に幅約2m・長さ約20mにわたって、元寇防塁の上面を構成する礫が多数密集して露出しているのを確認できる。石材は、砂岩(姪浜石)・変成岩が多いとされ



図3 百道元寇防塁(a) 南東→北西

る(柳田・西園 2001: 44頁)。これまで発掘調査は実施されていないため、詳細な構造等是不明である。ただし、西新地区の石塁と異なり、塁壁本体または上面にも多量の礫を使用していることが地表面からうかがわれることから、今津地区の元寇防塁に構造が類似する可能性もある。

b. 早良区百道1丁目807-82地点(百道地区)

共同住宅建設に先立って、1996年に福岡市教育委員会が確認調査した結果、元寇防塁を構成するものと同じ石材の礫の散布状況が検出されたが、すでに原位置から動いた状態であった(松村・池田 1998)。

c. 早良区西新7丁目国指定史跡元寇防塁（西新元寇防塁）：図4

1920（大正9）年10月に、「教育勅語下賜」30周年を記念して、西新尋常高等小学校の児童らの手により遺構の掘り起こしが行われた（川上 1941：74頁）²⁾。その後、1931（昭和6）年3月に国史蹟に指定され、遺構東側に小祠「元寇神社」が新設された。1961（昭和36）年7月には、福岡市教育委員



図4 西新元寇防塁(c) 北東→南西

会が防塁の崩落部分など一部を積み直した。さらに、1970（昭和45）年1月～3月にかけて福岡市教育委員会が石積み内側にコンクリートを詰め、防塁対面の法面をブロック貼りにし、防塁上面を芝生張りにするなどの保存整備工事を実施し、約22mの長さにならって遺構を野外露出展示する現在の姿に整えられた。しかし、1920年の掘り起こし以後の改変により、現在露出展示されている幅狭の石塁がどの程度本来の姿をとどめているのか疑問が呈されている（柳田ほか 1970：7頁、柳田 1984：373頁）。

この1970（昭和45）年の保存整備工事の際には、遺構東側の元寇神社東側部分で初めて小規模な発掘調査が実施され、防塁の南北方向断面構造の詳細な所見が得られた（柳田ほか 1970）。塁壁内部から陸側（南側）壁面の石積み部分にかけては粘土まじりの砂による基礎地業上に構築され、塁壁内部は砂と粘土を版築状に互層に重ねるが、海側（北側）壁面部分は地山の砂丘上にはほぼ直接石積みを行っている。防塁の基底幅は3.4mで、海側壁面の石積みには径50cm前後の大きめの石、陸側壁面には径30cm前後のより小形の石を使用している。石積みに使用された石材は、砂岩がもっとも多く、礫岩・玄武岩・変成岩なども確認されている。

d. 西南学院大学中央キャンパス1号館地点（早良区西新6丁目2番92号）：

図5・6

西南学院大学中央キャンパス1号館建設に先立って、1999（平成11）年9月～11月にかけて発掘調査が実施された（大塚編 2002, 柳田・西園 2001）。その結果、旧大学校舎基礎建築時に大きく破壊を受けていたが、防塁壁面石積み最下段の一部と、陸側（南側）に並走する土塁が検出された。層位状況（図5右）から、最初に基底幅2～3mの土塁が構築され、その後約50cm～1m離れた海側に基底幅約3.3mの石塁を構築した状況が確認されている。土塁は、地山の砂丘上に砂と粘土を版築状に互層に重ねて構築しており、高さ1.3mまでの残存が確認されている。また、土塁本体から陸側に向けて分岐して次第に低くなる細長い突出部が、5～6m間隔で設けられている（図6）。石塁は、土塁の海側（北側）裾部まで覆って粘土による基礎地業を行い、その上に塁壁本体の粘土の充填と陸側壁面の石積みを行っていた状況が確認されているが、石塁最下段より上はすでに大きく破壊されていたため、詳細は不明である。なお、石塁の海側壁面の石積みは、粘土の基礎地業の外側にあたる地山の砂層上から直接行われている。石塁構成礫は、海側壁面には50～60cmの大きさのものが使用されているのに対して、陸側は最大でも30～40cmであることも確認されている。また石材は、蛇紋岩が多く、角閃石・玄武岩などがこれに次ぐとされる。

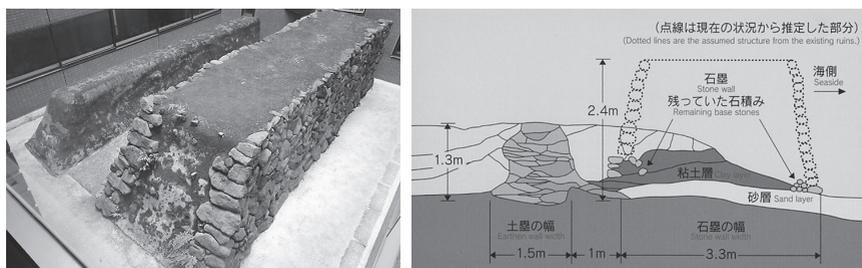


図5 大学1号館元寇防塁(d) 推定復元（北東→南西）と遺構断面+推定復元図



図6 大学1号館元寇防塁 (d) 検出遺構平面図

現在、原位置より北東側へ12mほど離れた1号館中庭（ライトコート）に、検出された石塁最下段石積みの一部を移築し、その上に高さ2.4mの石塁と、並走する高さ高さ1.3mの土塁が推定復元されている。ただし、土塁の陸側突出部は復元されていない。

- e. 西南学院大学中央キャンパス正門前道路付近（早良区西新3丁目・6丁目境界付近）：図7

1924（大正13）年12月、西南学院北側の市立西新尋常高等小学校新築予定地への道路（現：サザエさん通り）を新設するため、当時西南学院敷地内であった防塁が埋没している砂丘を南北に横断する掘削工事が行われた。その際に元寇防塁が破壊されて路肩に遺構の断面が露出したため、島田寅次郎



図7 中央キャンパス正門前道路付近（e）
現況 北西→南東

が詳細な観察調査を行った（島田 1925）。東西で状況が異なるが、粘土の基礎地業上に、塁壁内部も粘土を充填して海・陸側両壁面を石積みにした防塁を構築していた状況が記録されている。さらに、東側の石塁陸側（島田のいう「前面」）には砂と粘土が互層に積み重ねられ、西側の石塁陸側は粘土で厚く盛土されていた状況が指摘されている。これは、生の松原地区の防塁と類似した断面形態構造であったことを示唆している可能性もあるが、図面等を欠くため断定できない。なお、石塁の壁面は島田の観察記録着手前に解体搬出が進んでいたが、新設道路東側露頭部分でそれらの石塁解体石材が再利用されていた状況が記されている（島田 1925：45頁）。これらの石材が、後の旧西南学院高等学校（現：東キャンパス部分）西側通用口の門柱石組に再利用されていた元寇防塁石材と考えられる（図8左）。

旧西南学院高等学校西側通用口の元寇防塁石材再利用に関する詳細な経緯は不明で、石材の点数についても一定しないが、西側通用口の南北両側の門柱石



図8 旧高校西側通用口門柱石組・石碑（左）と宮崎宮境内移設後現況（右）

組とその上に設置された石碑が、いずれも元寇防塁石材の転用であったとされる³⁾。南側門柱上には「元寇防塁」、北側門柱上には「弘安四年五月元軍十萬此の地に来る我軍石塁に抛りて防戦士気大いに奮ふ為めに敵軍上陸する事能はず七十日空しく海上に漂ふ是れ即ち当時の防塁石也」と、それぞれ刻銘された石碑が設置されていた。しかし、本学院北側海岸での「シーサイドももち」地区埋立造成に伴い、1987（昭和62）年4月から開始された道路拡幅工事によって門柱石組・石碑ともに撤去された。それらは旧高校内でしばらく保管された後、東区箱崎の宮崎宮の申し出を受けて同宮に寄贈されるに至った経緯が、各種新聞記事で報じられている⁴⁾。現在、宮崎宮境内の一角に同宮所有の礎石と並んで石碑2点が野外展示され、その背後に元防塁石材とされる石約50点を再利用した植込みの石垣がめぐっている（図8右）。

f. 西南学院大学東キャンパス大学博物館北側地点（早良区西新3丁目13番1号）

1920（大正9）年に、西南学院本館・講堂（現：西南学院大学博物館建物）の建設予定地北側隣接部分から元寇防塁遺構が良好な状態で発見されている。詳細は後述する。

g. 中央区地行2丁目：図9

住宅街の一角の空地が指定地であり、その指定地内東南隅付近に礫が多数散乱する状況がみられるが、防塁構成石材であるかは不明である。これまで発掘調査は実施されておらず、詳細な構造等是不明である。現在、指定地外周には金網柵が設置され、内部に立ち入ることはできない。



図9 地行元寇防塁 (g) 南西→北東

3. 西南学院大学東キャンパス大学博物館北側の元寇防塁遺構

(1) 発見の経緯と遺構の特徴

1916（大正5）年に福岡市大名町（現：中央区赤坂1丁目）で創設された西南学院は、1918（大正7）年に現在の大学東キャンパス部分に移転する。1920（大正9）年に現在の西南学院大学博物館の建物である西南学院旧本館・講堂の建設が着工されたが、その際に建物建設予定地北側隣接部分に、元寇防塁遺構が良好な状態で埋没していたことが偶然発見されたのである。元寇防塁に関する調査研究史ではほぼまったく知られていないこの発見の経緯に関する詳細な記録は残されていないが、今回西南学院史資料センターと西南学院大学博物館のご協力を得て、西南学院史資料センター所蔵の戦前の個人作成アルバム中に同遺構が撮影された写真2点などが現存することを確認できた。

図版1は、西南学院創立者のC. K. ドージャー（Charles Kelsey Dozier）旧所蔵とされる1918年頃から作成が開始されたアルバム中の写真で、発見時に近い段階で撮影されたものと考えられる。アルバム中の写真横に、「A stone wall built during Mongolian Invasion Six hundred years ago.」と注記されており、発見当初から元寇防塁の遺構として認識されていたことがわかる。写真中央奥に旧



図版 1 大学博物館北側の元寇防塁：発見当初（1920年）頃



図版2 大学博物館北側の元寇防塁：保存と整備後（1921年以降）

西南学院中学部第一校舎建物西側面（現：西南コミュニティーセンター付近）などがみえるが、右手奥に位置するはずの現在の西南学院大学博物館建物である旧本館・講堂の建物はまだ存在しないため、1920年の着工最初期段階の写真と考えられる。

写真中の元寇防塁は海側（北側）壁面の石積み部分と判断される。ほぼ加工痕跡の無い平たい円礫石材を使用して、横目地がやや意識して揃えられた6～7段ほどの石積みであったことがうかがわれる。本学周辺で調査された防塁石積みの海側壁面に利用された石材の大きさを参考に、長軸平均50cm程度の大きさとすると、全長7～8m程と考えられる。なお、陸側壁面の掘り起こしは行われておらず、海側壁面背後の塁壁本体部分側はほとんど石が目立たない状況も確認できる。西新地区の他の元寇防塁本体部分と共通する塁壁内部を粘土や砂で満たす構造であった可能性が高い。

図版2は、西南学院のアメリカ人宣教師が1922年頃から作成を開始したアルバム中の写真で、背後に西南学院大学博物館建物である旧本館・講堂の北側1階が写っていることから、同建物が完成した1921（大正10）年以降に撮影された写真である。アルバム中には、「The Remains of Great Stone Wall built in the 12th Century to protect our shores against the Mongolian Invasion : Casually dug out in our Campus. We now preserve the above with special care.」と注記されており、石塁の偶然的な発見以後、西南学院が意識的に特別に遺構を保護していたことがわかる。実際に、石塁周囲は低い生垣で囲まれ、掘り起こした石塁周囲の法面は芝張りされており、遺構の保護と公開の両側面に配慮していた状況が写真からも容易にうかがい知ることができる。戦前の学院施設配置図中にも、「防塁」として位置が明記されている（図10）。ただし、特に左奥側（東側）の遺構中の特徴的な形態の石を基準に発見当初の写真と比較すると、おおむね発見当初の石積みがこの時点でも保たれているものの、中央部から西側にかけての最上段の石がいくつかこの時点で除去されていた状況も確認できる。また不明確であるが、陸側（南側）壁面側も掘り出されたようにみえる窪みの影も、写真右上方に確認できる。

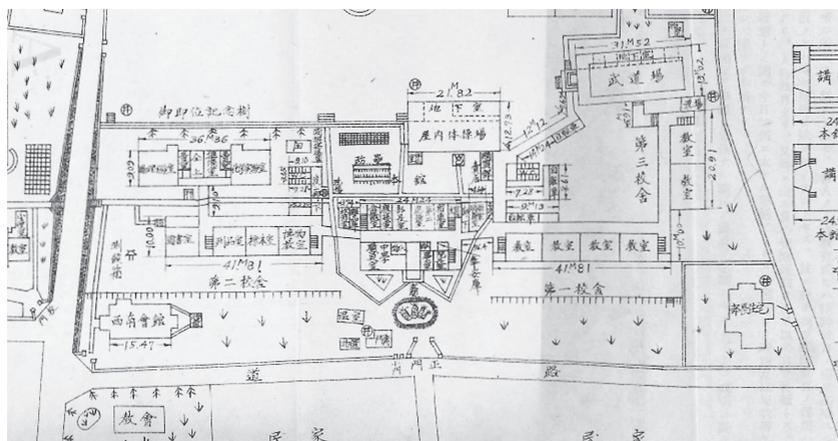


図10 1940年の西南学院施設配置図 ※中央左上に「防壘」表示

この写真を使用し、なおかつこの遺構そのものに触れた同時代の数少ない学内刊物に、1934（昭和9）年11月28日付発行の『西南学院新聞』第8号中の「学院スペクタクル：英霊永へに眠る 苔蒸せる防壘に捧ぐ 学院唯一の歴史的存在⁹⁾」という記事がある。この記事からも、この元寇防壘遺構が1934年11月の時点でも現存していたことが明らかである。同記事本文中では、「赤煉瓦の講堂の北側に柔かい芝生につつまれた元寇防壘跡は礼拝に行く学生達に、余りに冷たいものに見做されてしまっている」とし、当時の西南学院内の景観の中でやや違和感をもって受け止められていた様子が垣間見える。同時に、軍国主義的風潮を強めつつある当時の世相の元寇防壘観も記事の題名から読み取れる。

さらに、1938（昭和13）年には、西南学院卒業生の矢野久雄が、西南学院学友会刊行の『学友会雑誌』第20号に、「元寇防壘研究」と題する小論文を発表している（矢野 1938）。矢野は、研究の動機として、「今や国家意識熾烈を極むるの秋に当り国防に死力を盡し国難に殉じたる幾多英霊に深甚の敬意を捧ぐるため此の防壘の跡を親しく踏査した」（矢野 1938：22頁）と述べており、軍国主義的精神教育の徹底的な浸透状況がうかがわれる。しかし、その調査内

容自体は、百道・地行・姪浜・生の松原・今宿・今津の現地踏査を実施し、各地点の遺構残存状況やその構成石材名・遺構の規模を略測するなど科学的視点を保っている。これまでの元寇防塁研究史であまり知られていない貴重な情報も、図・写真を欠く簡潔な文章のみではあるがいくつか含んでいる。西南学院周辺の防塁に関する部分を引用すると、国指定史跡西新元寇防塁部分に続き、「石塁は更に西南学院高等部を経て中学部本館裏の庭内に至ってその原型が再び発掘されてゐる。長さ約七米、巾約三米半である。石材は玄武岩と礫岩とのみが露はれてゐる。更に防塁は新校舎北端下を経て砂原に出て稍左曲して樋井川に至ってゐる」（矢野 1938：23頁）と、報告している。つまり、現大学博物館建物北側で掘り起こされた石塁は、長さ約7m・幅約3.5mで、石材は主に玄武岩と礫岩から構成されていたという。さらに、旧西南学院中学部東端にあった当時の第三校舎北端下（現：西南コミュニティーセンター東端北側付近）を経て学院敷地外でやや北寄りに角度を変えて防塁の痕跡が樋井川までたどれた状況を記録している。

その後のこの防塁遺構の詳しい状況は不明であるが、「戦時中は蒙古襲来を記念して校内の防塁遺跡の上で、記念式があつて九州大学教授長沼賢海氏の講話、頼山陽の詩の吟詠などが行われていた」（西南学院高等学校40周年記念誌編集委員会編 1989：14頁）という伝聞記事があり、戦時体制下の学院内でおそらくこの防塁遺構が軍国主義教育を進める格好の素材として活用されていた状況をうかがうことができる。

アジア・太平洋戦争下の西南学院は、1941年に創立者ドージャー家などの宣教師のアメリカ帰国を余儀なくされ、学徒動員された学生を侵略戦争に端を發した国内外各地の戦場に送り出して多数の戦死者を出し、1945年の敗戦を迎える（西南学院の戦争責任・戦後責任の告白（案）作業部会編 2016）。

(2) 保存遺構のその後

現在の東キャンパス西南学院大学博物館建物北側から発見され、戦前に保護と公開が図られていた元寇防塁遺構であるが、これまでの元寇防塁研究や案内

書ではほぼまったくといって良いほど取り上げられていない。ただ、注意深く戦前の元寇防塁関連文献の内容を検討すると、たとえば1931（昭和6）年に、弘安役六百五十年記念元寇記念会によって刊行された『元寇史蹟案内』（弘安役六百五十年記念元寇記念会編 1931）に、現在も残る国指定史跡西新元寇防塁の写真とともに、「県営住宅の通路の西に発掘したる石築の構造を示しつつ更に西南学院の校庭内に其原型を現はし」という記述がある。そして、この「西南学院の校庭内」の元寇防塁こそが、この東キャンパス大学博物館北側の元寇防塁遺構を指していた可能性が高い。他の戦前に刊行された元寇関連史蹟案内書にも、ほぼ同じ記述が踏襲されたものが多いが、写真等も掲載されていなかったため、西新地区のほかの元寇防塁遺構や記念碑類と混同された可能性が考えられる。この当時までに確認された他の元寇防塁遺構と異なり、破壊の危機もなかった西南学院内の遺構が、1931（昭和6）年3月の国史蹟指定対象にならなかったことも無視できない。さらに、西南学院内でも外部の目に触れにくい奥まった内側の場所に位置していたこともあり、学院関係者以外には研究者を含め事実上ほとんど知られていなかったのではないかと考えられる。

また、戦後の西南学院側でも、この元寇防塁遺構に関する紹介や言及が途絶える。戦後の西南学院高等学校施設配置図でも、確認できる最古の1948（昭和23）年頃の該当部分には防塁の名は無く、四角形の花壇状の範囲表現に変わっている。また、国土地理院がインターネット上で公開している地図・空中写真閲覧サービス上で、戦後の各時期の空中写真を検討したが、この遺構の存在を特定することはできなかった。これらの状況資料から、この防塁遺構は戦後の非常に早い段階に地表からは直接確認できない状態になったと考えられる。その要因としては、たとえば戦中・戦後の混乱期に遺構の維持整備が追い付かず、植生繁茂や自然埋没が進み、各種危険性への配慮から完全に埋め戻された可能性がある。あるいは、敗戦後、戦時中の軍国主義教育体制を西南学院が急ぎ払しょくする過程で、奉安殿などともにこの遺構が軍国主義教育関連施設の一つとみなされ、意図的に遺構の埋め戻しまたは解体破壊が行われた可能性もある。そして、この場所に元寇防塁遺構が存在したことも忘れ去られていったのである。



図11 大学博物館北側の元寇防塁付近：左・1921年以降，右・現況

その後、新制西南学院高等学校では、生徒数の増加や施設の老朽化を受けて、遺構が存在した場所の周囲を取り囲むように次々に新たな建物が建設されることになる。現在の大学博物館建物の西側には、1951（昭和26）年10月竣工の高等学校西校舎が建設され、戦前の卒業生矢野久雄が防塁遺構の延長部分を確認していた第三校舎も1975（昭和50）年3月竣工の北校舎に建て替えられる。さらに遺構の北側には、1983（昭和58）年竣工の高等学校本館が新設される。おそらく、これらの建設過程でも、未知の元寇防塁関連遺構が破壊された可能性がある。ちなみに、1983年竣工の本館南西側にあった藤棚付近（現：西南クロスプラザ東端北側付近）に学院関係者の間で「防塁の石」とされるものが存在したとされ（柴田 2012：44頁，および図書情報課渡部光晴氏教示），これらに関連する可能性が高い。

しかし、今回紹介した大学博物館建物北側の元寇防塁遺構の位置を、各種施設配置図や現在の同位置写真（図11）と比較すると、1983（昭和58）年竣工の高等学校本館建物南端が近接するほかは、その後現在に至るまで遺構推定位置の直上には特に建物は建てられていない。大学博物館付近を中心とする東西方向には、旧砂丘頂部の名残をとどめた一段高い微地形が残っており、少なくとも防塁陸側（南側）壁面石積みなどの遺構の一部は、今なお大学博物館北側の同一標高芝生部分の地中に現存する可能性がある。

4. まとめ

早良区西新周辺では、国指定史跡西新元寇防塁や西南学院大学1号館元寇防塁が良く知られているが、東キャンパス部分にもかつて非常に良好な状態で従来の研究では知られていない元寇防塁遺構が存在し、しかも戦前に保存と整備まで行われていたことを今回確認することができた。

古写真を基にこの遺構の特徴を検討すると、西新地区の他の元寇防塁遺構と似通った海・陸側両壁面が石積みで塁壁内部を粘土や砂で充填する構造であったことが推察される。

このように良好な状態を保って戦前に発見され、しかも保護と公開が西南学院内で図られた遺構であったにも関わらず、これまでの元寇防塁研究史で取り上げられなかった要因としては、西新地区の他の元寇防塁遺構などと混同され、しかも学院関係者以外には目に触れにくい場所にあったことなどが考えられる。

戦時中には軍国主義教育の素材としても活用されていた状況がうかがわれる遺構であるが、戦後早い段階にその姿が消えてしまう。その要因としては、敗戦直後の混乱期に意図的な埋め戻し、または解体破壊が行われたことに由来する可能性がある。

しかし、遺構存在推定位置付近のその後現在に至る土地利用の変遷状況から判断すると、該当部分直上に直接建物は建てられていないため、少なくとも遺構の一部は現在も大学博物館建物北側の芝生部分の地中に現存する可能性がある。

仮に地中に今なお良好な状態で遺構が現存する場合、西新地区の元寇防塁のなかでも本来の状態をもっとも良くとどめた遺構となり、さらには西南学院のアジア・太平洋戦争期の負の歴史を象徴する数少ない遺構としての性格をもあわせもつ二重の歴史的文化遺産として、本学院の将来計画のなかで改めて保護と活用を図るべき価値があるといえる。

謝辞

本稿執筆にあたり、西南学院史資料センター事務室アーキビスト出口智佳子氏、元西南学院中学校・高等学校校長伊原幹治氏、西南学院史資料センター調査役（元西南学院中学校・高等学校事務長）篠田裕俊氏、西南学院大学図書情報課渡部光晴氏、西南学院大学博物館学芸員内島美奈子氏・同学芸調査員阿部大地氏、学校法人西南学院財務部施設課副課長宮崎太一氏より、学内所蔵資料について懇切なご教示と探索にご協力を賜りました。末筆ながら、お名前を記して御礼を申し上げます。

註

- 1) 『蒙古襲来絵詞』の描写と元寇防塁の発掘調査結果を比較検証した服部英雄は、生の松原地区元寇防塁の高さ復元算定根拠の問題点を指摘している（服部 2014）。今津地区の現存元寇防塁の平均的高さが1.8～2 mであることを確認し、層位状況を参照したうえで、生の松原地区の現在の復元防塁が、本来よりも高さが誇張されているとみなしている。
- 2) 西新小学校の校史をまとめた唯一の文献として創立百周年記念実行委員会編 1983『西新』、福岡市立西新小学校父母教師会（福岡）があるが、同小学校による西新元寇防塁の掘り出し事業に関しては特に記載がない。なお、以下の文献に、西新尋常高等小学校の児童らの西新元寇防塁掘り起こし作業状況の写真が収録されている。

福岡市立歴史資料館編 1974『元寇七百年展目録』、福岡市立歴史資料館（福岡）

- 3) 現在の東キャンパス西側にあった、かつての西南学院高等学校の西門通用口両側（南北側）の元寇防塁石材を利用したとされる門柱石組と石碑については、以下の記事等に記述がある。

著者名不明 1982「赤れんが〈歴史的遺産〉元寇防塁」、『西南学院高等学校広報』第4号：4頁、西南学院高等学校（福岡）

著者名不明 2014「元寇防塁の記念碑」、『Seinan Spirit』No. 189：21頁、西南学院総務部広報課（福岡）

- 4) 現在の東キャンパス西側にあった、かつての西南学院高等学校の西門通用口の元寇防塁の石材を利用したとされる門柱石組と石碑の撤去と、東区宮崎宮への寄贈の経緯については、以下の新聞記事等に記述がある。

著者名不明 1987「貴重な“歴史”が消えていく…元寇防塁の石 四散 アジア博会場道路取付工事〈遺跡といえず〉」、『西日本新聞』1987年11月13日付、西日本新聞社（福岡）

著者名不明 1988「元寇防塁 宮崎宮に復元 西南高裏の石垣移転」、『読売新聞』1988

年6月12日付, 読売新聞西部本社(福岡)

著書名不明 1989「防塁石の庭と資料館 筥崎宮 郷土の歴史を身近に 将来は元寇資料も展示」, 『西日本新聞』1989年8月30日付, 西日本新聞社(福岡)

著者名不明 2014「元寇防塁の記念碑」, 『Seinan Spirit』No. 189: 21頁, 西南学院総務部広報課(福岡)

5) 著者名不明 1934「学院スペクタクル: 英霊永へに眠る 苔蒸せる防塁に捧ぐ 学院唯一の歴史的存在」, 『西南学院新聞』第8号: 1頁, 西南学院新聞部(福岡)

引用・参考文献

- 愛宕 元 1991『中国の城郭都市: 殷周から明清まで』, 中公新書1014, 中央公論社(東京)
- 荒牧宏行編 2001『国史跡 元寇防塁(生の松原地区)復元・修理報告書』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 井沢洋一編 1992『博多32: 博多遺跡群第68次発掘調査報告』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第287集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 井澤洋一・長家伸 1995「9305 地蔵松原防塁(GKB-1)」, 『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 8(1993年度): 95頁, 福岡市教育委員会(福岡)
- 井上繭子 2008「博多の元寇防塁」, 『中世都市・博多を掘る』: 48-51頁, 海鳥社(福岡)
- 榎本義嗣 2000「0035 元寇防塁跡第9次調査(GKB-9)」, 『福岡市埋蔵文化財年報』VOL. 15(平成12・2000年度版): 52-54頁, 福岡市教育委員会(福岡)
- 大塚紀宜 2013「第3章 元寇防塁と博多湾: 防塁の構造とその戦略的機能について」, 『新修福岡市史』特別編(自然と遺跡からみた福岡の歴史): 302-317頁, 福岡市(福岡)
- 大塚紀宜編 2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集, 福岡市教育委員会(福岡)
- 鏡山猛ほか 1968『福岡市生の松原元寇防塁発掘調査概報: 鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査』, 福岡市教育委員会(福岡)
- 鏡山猛ほか 1969『福岡市今津元寇防塁発掘調査概報: 鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第二次(昭和43年度)調査』, 福岡市教育委員会(福岡)
- 片倉 穰 1998『日本人のアジア観: 前近代を中心に』, 明石書店(東京)
- 川上市太郎 1941『元寇史蹟(地之巻)』, 福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14輯, 福岡県(福岡)[復刻: 1979 福岡県文化財資料集刊行会]
- 川添昭二 1971『註解 元寇防塁編年史料: 異国警固番役史料の研究』, 福岡市教育委員会(福岡)
- 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』, 雄山閣出版(東京)
- 川添昭二 2006「元寇防塁が語るもの: 福岡市史編さんに備えて」, 『市史研究ふくおか』創刊号: 5-39頁, 福岡市博物館市史編さん室(福岡)
- 木本元治編 1994『国指定史跡阿津賀志山防塁保存管理計画報告書』, 国見町文化財調査報

- 告書第9集, 国見町教育委員会 (福島)
- 九州大学埋蔵文化財調査室 2016『箱崎遺跡 九州大学箱崎キャンパス中央図書館前南地点現地説明会資料』, 九州大学埋蔵文化財調査室 (福岡)
- 弘安役六百五十年記念元寇記念会編 1931『元寇史蹟案内』, 弘安役六百五十年記念元寇記念会 (福岡)
- 佐藤一郎編 2002『博多85：博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集, 福岡市教育委員会 (福岡)
- 柴田道明 2012「さらば西新校舎：西南学院高校の忘れがたき思い出」, 『西南学院史紀要』7号：39-47頁, 西南学院百年史編纂準備委員会 (福岡)
- 島田寅次郎 1925「西新町(百道原)新発掘元寇防塁の横断面」, 『筑紫史談』第34集：巻頭写真下・44-45頁, 筑紫史談会 (福岡)
- 下原幸裕編 2009『西新町遺跡Ⅱ：福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第22次調査報告書』, 福岡県文化財調査報告書第221集, 福岡県教育委員会 (福岡)
- 昭和地下工業株式会社編 1972『福岡市昭和46年度史跡元寇防塁(今津地区)復元補強試験報告書』, 昭和地下工業株式会社 (福岡)
- 西南学院高等学校40周年記念誌編集委員会編 1989『西南学院高等学校開設40周年記念誌』, 西南学院高等学校 (福岡)
- 西南学院史企画委員会編 1986『西南学院七十年史』上下巻, 学校法人西南学院 (福岡)
- 西南学院の戦争責任・戦後責任の告白(案)作業部会編 2016『西南よ, キリストに忠実なれ：西南学院創立百周年に当たっての平和宣言』, 学校法人西南学院 (福岡)
- 孫永植(손영식) 2011『한국의 성곽』, 주류성출판사 (서울)
- 竹田雅弘編 1915『元寇史蹟の新研究』, 史蹟現地講演会編纂, 丸善株式会社 (東京)
- 中山平次郎 1913『福岡附近の史蹟：殊に元寇の史蹟』, 九州帝国大学医科大学雑誌部 (福岡)
- 中山平次郎 1915「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」, 『元寇史蹟の新研究』：309-335頁, 史蹟現地講演会編纂, 丸善株式会社 (東京)
- 服部英雄 2014「第九章 石築地(元寇防塁)考」, 『蒙古襲来』：467-483頁, 山川出版社 (東京)
- 福岡市教育委員会編 1978『史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書』, 福岡市教育委員会 (福岡)
- 松村道博・池田祐司 1998「9662 元寇防塁第6次調査(GKB-6)」, 『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 11(1996年度)：70頁, 福岡市教育委員会 (福岡)
- 柳田純孝 1981「元寇防塁：その歴史と構造」, 『海から甦る元寇』：22-26頁, 朝日新聞西部本社企画部 (福岡)
- 柳田純孝 1984「3 元寇防塁と博多湾の地形」, 『古代の博多』：365-394頁, 九州大学出版会 (福岡)
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」, 『よみがえる中世』1 東アジアの国際都市博多：

180-194 頁, 平凡社 (東京)

柳田純孝ほか 1970 『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報: 鎌倉時代 (13 世紀) における蒙古襲来に対する石築地の第三次 (昭和 44 年度) 調査』, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 11 集, 福岡市教育委員会 (福岡)

柳田純孝・西園禮三 2001 『元寇と博多: 写真で読む蒙古襲来』, 西日本新聞社 (福岡)

矢野久雄 1938 「元寇防塁研究」, 『学友会雑誌』 第 20 号: 22-26 頁, 西南学院学友会 (福岡)

山中章編 1983 『史跡長岡宮跡築地跡調査・整備報告』, 向日市埋蔵文化財調査報告書第 9 集, 向日市教育委員会 (京都)

挿図出典

図 1・3・4・5 左・7・8 右・9・11 右: 筆者撮影

図 2: 国土地理院地図 (電子国土 web) を基に筆者作成

図 5 右: (柳田・西園 2001: 47 頁 091 図)

図 6: (大塚編 2002: 5 頁 Fig. 2)

図 8 左・図 10・図 11 左・図版 1・2: 西南学院史資料センター提供